

学位論文の内容の要旨

氏 名

鎌田 英紀

論文題目

Long-Term Management of Recurrent Cholecystitis after Initial Conservative Treatment: Endoscopic Transpapillary Gallbladder Stenting

(論文要旨)

【はじめに】急性胆嚢炎治療の第一選択は早期の胆嚢摘出術であるが、併存疾患のために手術が困難な症例も存在する。手術が困難な場合、胆嚢ドレナージが必要となり、経皮経肝胆嚢ドレナージが推奨されている。しかし、抗凝固療法中の患者や胆嚢炎悪化によるDICの併存により、出血傾向にある場合や腹水がある患者、解剖学的に穿刺困難な場合は経皮ドレナージは困難である。このような患者に対して内視鏡的経乳頭的胆嚢ドレナージ/ステント留置 (ETGBD/S) が有効である。しかし、内視鏡的経乳頭的胆嚢ドレナージは経乳頭的処置であるため、ERCPに関連した偶発症のリスクもある。また、抗生剤治療や経皮的ドレナージで治癒が得られる症例も多くみられることから、ETGBD/Sは従来の治療法で改善が得られた後の再発性胆嚢炎に対する治療として適していると考えられる。これまでの胆嚢炎に対するETGBD/Sの報告は急性期における報告がほとんどで、再発性胆嚢炎に対する長期予後の成績を示した報告はほとんど見られない。本研究では再発性の胆嚢炎に対するETGBSの長期成績について後方視的に検討することを目的とした。

【対象】2006年6月から2012年5月までの間で一次治療後に再発した手術困難な胆嚢炎患者でETGBSを施行した19名を対象とした。手術困難の定義は悪性疾患や脳血管障害、心疾患を有しており、術後の偶発症や死亡率が高いと思われる症例や抗凝固剤や抗血小板剤内服中で出血のリスクが高い症例とした。また、解剖学的理由や腹水を有しており経皮ドレナージが困難な症例も対象とした。

ETGBSは胆嚢炎の再発を予防する目的で施行した。

【手技の方法】通常のERCPに引き続き、seeking用ガイドワイヤーで胆嚢管を探り、胆嚢内にガイドワイヤーを進める。Seeking用ガイドワイヤーに追従させて造影カテーテルを胆嚢内に進め、デリバリー用のガイドワイヤーに交換した後に、両端pig tail型のステントを胆嚢から十二指腸にかけて留置する。

【評価項目】主評価項目は臨床成功率として経過観察中の胆嚢炎の再発率を評価した。副評価項目は手技の成功率と手技に伴う偶発症発生率とした。

【結果】手技の成功率は94.7% (18/19例) で偶発症は5.3% (1/19例) にERCP後瘵炎を認めた。観察期間の中央値は14.95か月で、成功した18例において観察期間中の胆嚢炎の再発はみられなかった。

(表1)

表1 Outcomes of endoscopic transpapillary gallbladder stenting (n = 19)

Primary outcome	Clinical success rate, % (n)	100 (18/18)
Secondary outcomes	Technical success rate, % (n)	94.7 (18/19)
	Procedure-related adverse events rate, % (n)	5.3 (1/19) [#]

[#]Mild acute pancreatitis

【結語】内視鏡的経乳頭的胆嚢ステント留置は手術困難な再発性胆嚢炎患者に対する初期治療後の長期管理に効果的である。

掲載誌名	Can J Gastroenterol Hepatol Volume 2018, Article ID 3983707, 7 pages		
(公表予定) 掲載年月	2018年 4月	出版社(等)名	HinDawi
Peer Review	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無		

(備考) 論文要旨は、日本語で1,500字以内にまとめてください。